

クレジット:

UTokyo Online Education 東京大学朝日講座 2017 蓑輪 顕量

ライセンス:

利用者は、本講義資料を、教育的な目的に限って、特に記載のない限り、クリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 ライセンスの下で利用することができます。

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等を本講義資料から切り離して利用することはできません。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。

The background image shows a scenic mountain landscape. In the foreground, there are wide, reddish-brown stone steps leading up a hill. To the left, a stone wall with a decorative geometric pattern runs along the steps. Above the wall, numerous colorful prayer flags (in shades of blue, red, yellow, green, and white) are strung across the scene, some hanging from trees and others from a line. The background features large, grey rock formations and dense green foliage under a bright sky.

偶然と必然は表裏一体か —仏教者の見た世界—

朝日講座「偶然という回路」

インド哲学仏教学研究室

袁輪顯量

* そもそも「偶然」ということがありうるのか

- インドの基本的了解 「善因楽果 悪因苦果」
＜良い原因には楽なる結果が、悪い原因には苦なる結果がもたらされる＞ どんな結果にも必ず原因があるという発想
- *Upanishad*の伝統 *karman*の思想 「行い (*karman*)は後々までも影響力を及ぼす」

- アールタバーガが哲人ヤーージュニャヴァルキヤ仙人に尋ねる、人が死ねば何が残るのか、と。そこで、彼は、彼を誰も居ないところへと連れて行き、「それは業カルマンである」との秘儀を明らかにした。
- (『ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド』)

カルマンkarman業と訳される

- 行為を為すこと、行い、振る舞い、強大な拘束力を持つ持続的エネルギー。潜在的な能力を表すという点では、サンスカーラ saṃskāra 行とほぼ同じ。持続力、慣性力、形成力、潜勢力などとも訳される。（『岩波哲学・思想事典』参照）
- ここから考えれば、あらゆる事柄は業の結果となり、「偶然」と言うことはあり得ない

インドの二大叙事詩から

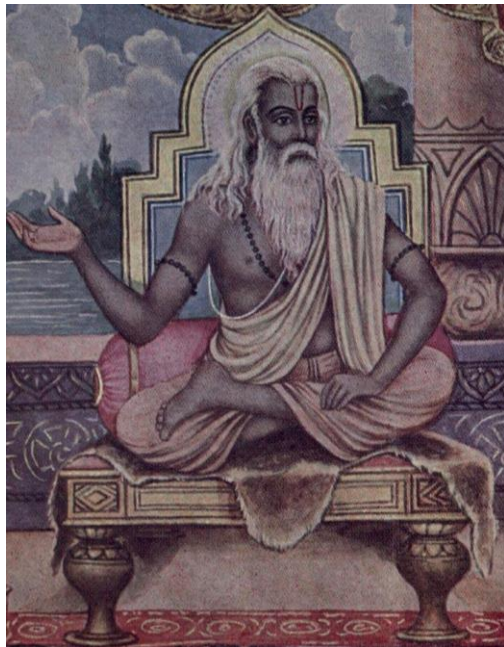
- ところで、インドの文学的な作品の中の考え方では「人事(人間の努力)と天命(運命)」で理解されることが多い。しかも、「人間の努力」と「天命」は常に表裏一体のものとして理解された。
- * 運命と訳しうる単語 kala, diṣṭa, vidhi, daiva, bhagya, bhagadhaya, bhavya, などが想定される(原実「古典インドの運命観」東京大学文学部研究紀要「哲学論文集」1972,(80)-(81)頁を参照、以下、訳文は引用)

運命と訳しうる言葉

- 人間の努力と関連することば pauruṣa (puruṣa人から派生した形容詞←→deva神々)またはpuruṣa-kara。
- :「運命と訳しうるdaivaは、本来はdevaに由来するが、通俗語源的に<div-戯れる>とも関連すると捉えられ、daivaには不覇奔放、気まぐれ、随って人為の及ばぬところと為す意味合いが時として看取される。」(原実、同書、(81))

Daivaには二つの意味が！

- ＊インドでは言葉の上で時として運命と気まぐれ(これは正しく「偶然」に相当する)が同一視される考え方のあったことが見いだされる！



<https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Vyasa.jpg>
最終閲覧日:
20180213

マハーバーラタの作者とされる
ヴィアーサ

Mahābhārata の記述

- 「人為と運命、解脱・束縛、畏・不畏、殺生・不殺生、苦行と祭式と自制、毒・薬。
(12.121.26)」＜対立する概念として列挙される＞
- 思いも掛けなかった事態が起こるとき、人為と運命の相克が意識されるのが常
- 「考えた如くとは凡そ別様に事柄生ず。ああ、天の道は力あり、時の勢いは超え難し。
(8.5.45)」

結果は裏目に出ることも

- 「得失を知る賢者が周到に吟味するも、風向きの如く、物事別様に展開す。よく協議し、検討し、道理に適って選ばれたる人間の営みも、天の時によりて妨げられる。(5.75.8)」
- 「賢き人々が事柄を思量なせるとは凡そ異なつて、その事、運命の故に全く別様に行くものと吾思う。(7.10.50)」
- 「運命の行末は、智者によるも知り難し。されば、今、無敵のクリシュナが汝を守るも、汝は身寄り無き者の如く、戦場に斃る。(7.55.19)」

- 「政略に拠り汝は彼らを森に払いたり。しかして汝の努力もてなせるところは天の道に阻まれたり。(7.127.19)」
- 「もと不可能なことを、たとえ有力なりと雖も、何人が力づくでこれをなしえん。蓋し人の道は、天の道よりも重からずと言わる。(10.6.25)」

- ＊ことが計画通りに運ばず不本意の結果を招くのは、人為と運命の両者がうまくかみ合っていない事による、と考えている。よって、「計画をよく吟味するだけではなく、果たして天の時が至り、機が熟しているか否かをよく見定めるべきである」との思考が存在したことが知られる。

『ラーマーヤナ』の記述から

- 「人とあいはかって事を起こし、運幸するときに努力を為すものは人中の最高なりと人々言う。・・・得失を考えず、天の時に拠らず、「為さん」とてすべきことをおろそかにする者、そは人中の最低なり。(ラーマーヤナ,6.6.8-10)」

- 「よく吟味されたりとも物事は天の時により破らるとあれば、賢者は須く天の時到来するにおいて努力を為すべし。(4.19.8)」
- 「有能にして忠節の心ある士の常になすべきこと、それを吾なさん。勝敗は天の時に懸かる。今や君のおんため、己が人事を尽くして我はアルジュナと戦わん。(7.120.28-29)」
- 「決断力ある士が為すべきと思うこと、それを躊躇わずなすべし。成敗は天の時に懸かる。(7.127.17)」

インドの基本的な了解

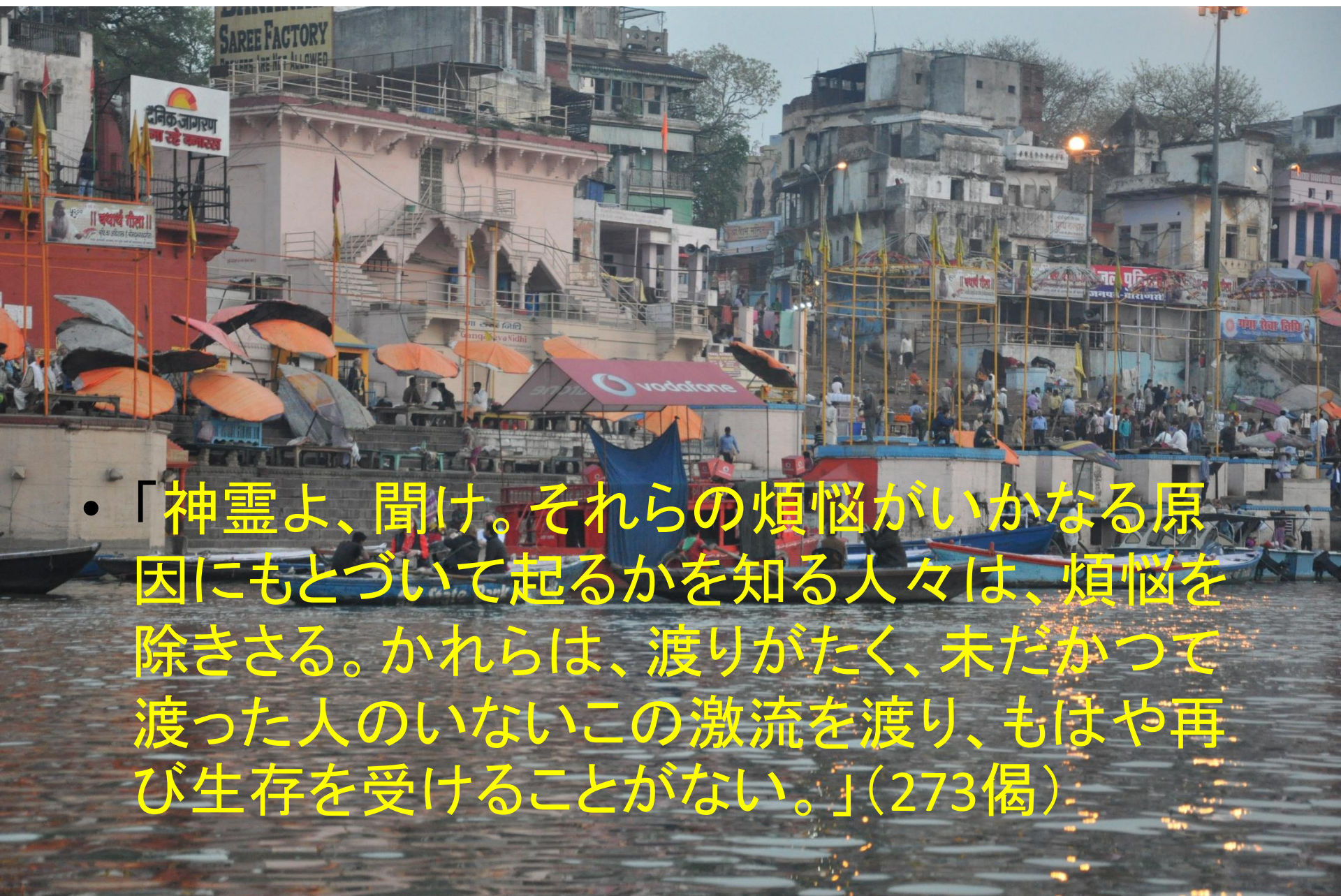
- ＊いずれにしても「人為」か「天命」か、という見方が強い。
- 業の問題点
- 全て過去の結果として考察すると、未来はすでに決まってしまった運命論に陥り兼ねない。
- しかし仏教では、そのようには説かない。

ブッダ Shakyamuni (釈迦牟尼佛) の主張

- 代表的な初期仏典 *Suttanipata* (経集) の記述から (中村元訳『ブッダのことばースッタニパータ』岩波文庫 1984 年から引用)
- 「勝れたものを知り、すぐれたものを与え、勝れたものをもたらず勝れた無上の人が、妙なる教えを説きたもうた。この勝れた宝が < 目ざめた人 > (ブッダ) のうちに存する。この真理によって幸せであれ。」(234偈)

- 「古い(業)はすでに尽き、新しい(業)はもはや生じない。その心は未来の生存に執着することなく、種子を滅ぼし、それが生長することを欲しないそれらの賢者は、灯火のように滅びる。このすぐれた宝が<つどい>のうちに存する。この真理によって幸せであれ。」
(235偈)

- 「貪欲と嫌悪とはいかなる原因から生ずるのであるか。好きと嫌いと身の毛のよだつこと(戦慄)とはどこから生ずるのであるか。諸々の妄想はどこから起って、心を投げうつのであるか。一あたかもこどもらが鳥を投げすてるように。」(270偈)
- 「それらは愛執から起こり、自身から現れる。あたかも榕樹の新しい若木が枝から生ずるようなものである。それらが、ひろく諸々の欲望に執着していることは、例えば蔓草が林の中にはびこっているようなものである。」(272偈)



- 「神霊よ、聞け。それらの煩悩がいかなる原因にもとづいて起るかを知る人々は、煩悩を除きさる。かれらは、渡りがたく、未だかつて渡った人のいないこの激流を渡し、もはや再び生存を受けることがない。」(273偈)

* 基本的に原因があって結果が生じるという考え方を主張する

- しかし、一方で、大乘仏教になると、実体はないと説く点に強調点がうつる。すなわち、原因も決して実体として存在するわけではないので、結果も実体として存在するものではないとするようになる。変化しない、すなわち変わらない何かがあるとはしない。

Nāgārjuna 龍樹(2-3世紀)の 『宝行王生論』の主張

- (初期仏教と大乘仏教の主張がともに含まれている点で興味深い)
- 「生起には原因があると見て、無を超えます。滅は原因を伴うものである{とみて}、有に近づくことはありません。(一.46)」



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Nagarjuna_at_Samye_Ling_Monastery.JPG
最終閲覧日: 20180213

- {結果より}先に生じている原因とか,{結果と}同時に生じている原因とかは、原因・結果という言葉の意味からして、原因たり得ません。世間的な言説としても、真実としても、生起したものではありませんからです。(一・47)

- これがあるとき、かれがある、たとえば長があるとき、短があるように。これが生じるとき、かれが生じる。たとえば灯火が生じるとき、明るさが生じるように。(一・48)
- 一方また、短がなければ、長は存在しません。自性を欠いているからです。また灯火が生じなければ、明るさもまた生じません。(一・49)

一重線 初期仏教の主張

線なし 大乘の主張

- 以上のように原因によって結果が生じることを見れば、この世間の真実性(世俗諦)は戯論から生じていることを理解して、無に近づくことはありません。(一・50)
- また、原因の滅による結果の滅は、真実性という観点からして、戯論から生じたものであると理解した人は、有に近づくこともありません。それゆえ、有と無の両者に依拠することのない人は解脱するのです。(一・51)
-
- (桂紹隆・五島清隆『龍樹『根本中頌』を読む』春秋社、2016、294頁)

- (なお、龍樹の『根本中論』は大乗仏教のもっとも基本となった論典 実体があるとすれば、様々な矛盾が生じるという視点から述べたもの)

＜では漢訳の経論の中に「偶然」 という言葉は登場するのか＞

- SAT(大正新修大蔵経データベース)の検索でヒットする用例 76例 インド起源の経律論の中ではわずか3例のみ。40例は「偶然に」の意に、35例は「偶然ではない」の意で使用
- ＜語句の説明＞
- 『一切経音義』「偶然 上五狗反。余雅云、偶遇也。郭注云、偶直也。説文、從人禺聲。(54,588c21)」

・『佛說海意菩薩所問淨印法門經』

- 「昔之現夢、今之值經、似非偶然、澂願藉是因緣。首度先父大學士文靖公嚴訥、先母一品夫人吳氏、即生蓮界。見佛聞法、得阿耨多羅三藐三菩提。」(昔、夢に現れたのも、今、お会いしたのも、偶然ではないようであり、願いを澄ませて顧みるのは因緣である。…)
(大正13.522c8-11)

『大方廣如來藏經』

- 「止於下劣弊惡之家、偶然交通腹中懷妊、決定是爲轉輪王胎。然彼女人、雖復懷妊、亦曾無有如是思念。唯懷貧匱下劣之心。由心羸劣常作是念。（下劣で壊れた粗末な家に止まり、たまたま気持ちを通じ合いお腹に子供を授かったが、間違いなく轉輪（聖）王の子である。…」」(大正16,463c7-11)

- 中国で撰述された経論・史書の中には「偶然」という語は屢々登場し「偶然ではない」という文脈で使われる場合も、また「偶然に」という場合もあるが、「偶然」とする用例が少しばかり多い。

著作権等の都合により、ここに挿入されていた画像を削除しました。

書籍表紙画像

慧皎 著、吉川忠夫・船山徹 訳『高僧伝(二)』岩波書店、2009年。

<https://www.iwanami.co.jp/book/b246378.html>

(例文)

- 『四明尊者教行録』「觀師早承天台禪師、即百録陳佰智。薦眞觀惠陪二法師是也。今作智者道場、非偶然而來。蓋承此餘蔭耳。(…今、智者の道場となったのも、偶然にそうになったのではない。恐らくは此の余蔭を受けついたのであろう。)」(大正46,907a7-9)

『仏祖歴代通載』

- 「對曰、襄州與廓侍者同夏。院曰、親見作家。穴、於是俯就弟子之列、從容承稟、日聞智證。南院曰、汝乘願力來荷大法、非偶然也。問曰、女聞臨濟將終時語不。曰聞。(・・・汝は願力に乗って大法を持ち来たり担われたが、(それは)偶然ではないのだ。・・・)(大正49,657b8-11)」

『興禪護国論』

- 「二十七歳、在伯耆州大山修一夏。偶然有得唐本法華經、則自以爲渡海之祥。遂告父母而赴筑州。會遇宋國通事李德昭者於博多津、聞彼地禪宗之盛。發希有思。(…伯耆国、大山にあつて一夏を修した。たまたま唐本の『法華經』を得ることがあり、そこで自ら渡海のよい知らせとした。…)」(大正80,1a20-23)

『大覚禪師語録』(蘭溪道隆)

- 「辭衆上堂。昔年來主此山、初非計會。今日往興彼刹。事豈偶然。其中雖有千里之遙、據實本無一毫之隔。既無一毫之隔、東州打鼓、西國上堂、巨福山中合掌、建寧寺内燒香、諸人還肯此語也無。若也肯去、是我同流。
- (衆を離れて上堂。昔からずっとこの山の主となり、初めて考えたのではない。今日、あの仏寺に行って興すのだ。事はどうして偶然であろうか。其の中にたとえ千里の遙かさが有ったとしても、真実に拠れば、本来髪の毛一本ほどの隙間もないのだ。・・・)」(大正80,63b3-7)

- 中国の伝記の中で、出会いも偶然ではないとする話の典型として、天台宗の慧思(515-577)と智顗(538-598)の河南省大蘇山における邂逅の場面の記事が想起させられる

- 智顗傳（『統高僧傳』卷17）「又詣光州大蘇山慧思禪師、受業心觀。思又從道於就師、就又受法於最師。此三人者皆不測其位也。思每歎曰、「昔在靈山同聽法華。宿緣所追今復來矣。」即示普賢道場、爲說四安樂行。顗乃於此山行法華三昧。始經三夕、誦至藥王品、心緣苦行。至是真精進句、解悟便發。見共思師處靈鷲山七寶淨土聽佛說法。故思云、非爾弗感。非我莫識。此法華三昧前方便也。」(大正56,564b15-21)

(和訳)

- (・・・慧思がいつも嘆息して言われたことには「昔、靈山にあって(お前さんと)同じく『法華経』を聞いた。宿縁の追うところが、今、またやって来たのだ」と。すぐさま普賢道場を示され、四つの安樂行を説かれた。智顗はそこでこの山において法華三昧を行じられた。・・・だから慧思は言われた、「お前さんでなければ感応することはなく、私でなければ、識ることはない。此れは法華三昧の前方便なのだ」と。）」

日本の説話にみる「因果応報」 偶然 はないことを示すことに

- 『日本霊異記』(8世紀初頭に成立か 現在の行いの報いが現在世に現れるもの(現報)を中心に述べたもの、次の生存に現れるもの(生報)、第三世以降で現れるもの(後報)

「子の物を盗み用い、牛となりて使われ、異らしき表を示す縁(仮名遣いを読みやすく変更)」

- 「大和の国、添えの上の郡山村の中の里に、昔棕の家長の公というもの有り。十二月に当りて方広経に依りて先の罪を懺いむと欲う。使人に告げて云わく、一人の禅師を請くべし」という。其の使人問いて曰わく、「何の寺の師を請けむ」という。答えて曰わく、「其の寺を選ばず、遇うに随いて請けよ」という。其の使、願に随いて、路行く一の僧を請け得て家に帰りつ。家主、信心して供養す。其の夜、礼経已に訖わりて、僧息まむとする時に、檀主、設くるに被を以て覆う。僧すなわち心に念わく、明日物を得むよりは、如かじ、被いを取りて出でんには、と思う。

- 時に声有りて言わく、「其の被を盗ることなかれ」という。僧大きに驚き疑い、家の中を顧み窺い、人を覓むるに、唯一つの牛有り、家の倉の下に立てり。僧、牛の辺に進むに、語りて言わく、「吾は此の家長の父なり。吾先の世に人に与えんと欲うがために、子に告げずして稲十束を取れり。所以に今牛の身を受けて先の債を償うなり。汝は是れ出家なり。何ぞたやすく被を盗まむとはする。其の事の虚実を知らんと欲わば、我がために人の座を設けよ。我まさに上がり居るべし。其の父と知るべし」という。是に僧、則ち大きに愧じ、宿所に還り止まる。明朝に事行已に訖りて曰わく、「他人をして遠く却かしめよ」と言う。

- 然して後に親族を召し集めて、具に先の事を陳ぶ。檀越、即ち悲しみの心を起こして、牛の辺に就きて、藁を敷きて、白して言わく、「實に吾が父ならば、此の座に就け」という。牛、膝を屈めて座上に臥す。諸親、声を出して大きに啼きて言わく、「實に吾が父なり」という。便ち起ち礼拝して、牛に白して言わく、「先時に用いし所は、今咸く免し奉らん」という。牛、聞きて涙を流して大息す。即日の申の時に命終わる。然して後に、覆いし被と財物を以て其の師に施し、更に其の父のために、広く功德を修む。因果の理、豈信けざらむや。」(『日本靈異記』上巻、日本古典文学大系、97-101。)

結語

- 偶然と思われるものも、実は宿縁のあったものとして受け止める例が多い。偶然と必然は、実は表裏一体のものとして受け止められていた。

グループワークテーマ

- ①「人事を尽くして天命を待つ」との諺があるが、人事と天命の相互の関係をどう考えたら最もよいのだろうか、意見を述べなさい。
- ②「偶然と考える」とことと「必然であると考え」ことに、どのような意味があるのか、心理的な側面にも留意しながら考え、意見を述べなさい。
- ③「人の行いは影響力を持つ」とする業の考えや「物事には必ず原因がある」とする因果応報の考え方が、日本人の思考に影響を与えているのかどうか考え、意見を述べなさい。